

第12章 瓦礫の中での無力感。でも、故郷を変えたい。

宮城県・性と人権ネットワーク E S T O

内海章友さん



実施日：2019年8月16日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：女川町まちなか交流館（女川町）

【プロフィール】

1974年、宮城県石巻市出身（インタビュー時44歳）。福祉関連の仕事をしながら、2000年頃から東北HIVコミュニケーションズやAnegoなどの活動に、また2001年頃からは性と人権ネットワークE S T Oの活動に参加。2011年の東日本大震災で被災し、東京へ避難した後はE S T Oの活動を中心に行う。2017年に石巻へ戻り、現在はE S T O副代表を務める。

1. 震災まで

◆家族構成と子ども時代

家族は父、母、妹の3名です。父は70歳、母は69歳です。

出身は、宮城県石巻市と答える場合と、福島県安達郡白沢村（現・本宮市）と答える場合があります。

というのも、うちの両親には先天性の聴覚障害があり、私の口語の獲得は遅れ気味でした。通っていた石巻の保育所の同じ年頃の友達から「口が利けない」「知恵遅れじゃないか」と言われていたこともあり、年に数回、白沢村（福島県）にある母方の実家へ行き、毎回2～3週間滞在して言葉を覚えたり、口語の練習をしました。だから、私にとっては、福島の10人近い大家族も、石巻も、どちらも故郷で、方言も石巻弁と福島弁が混じっていると思います。

白沢村との往復は保育所～小学校3、4年生ぐらいまで続きました。その間、担任の先生が変わる度に、「言葉が覚えられないから、この子は特殊学級の子じゃないか」とか、「親が聞こえないっていうのは字書けんのか、字も読めないんじゃないの」とか、「そういう親の子どもでは先が思いやられる」などと、先生の言葉とは思えないようなことを言われ続けていました。

親類からの勧めもあって白沢村に行っていましたが、僕は、いとこのお兄ちゃん、おばあちゃん、ひいばあちゃん、じいちゃんらに会えると思って喜んで行っていたので、嫌ではなかったんです。帰るところが2つあるような生育環境はあまりメジャーではないことを小

学校の友だちに聞き、「なるほど、僕の育った環境は普通とはちょっと違うんだな」と思っていました。

◆大学で福祉について学ぶ

石巻と白沢村をずっと行ったり来たりしながら育ちましたが、高校生になるとさすがに白沢村へはお盆と正月に行くぐらいになりました。

1993年に東北福祉大学に入学しました。仙台にアパートを借りたり、石巻の家から仙台まで列車で通ったりしていました。

通っていた高校の指定校推薦で、「明治・中央・法政のどれかだったら法学部の推薦取れるぞ」と言われたんですね。「じゃあとりあえず法政でいいか」と思って、指定校推薦なので高3の4月、5月頃に進路が決まったんですが、その後になって「法学部って何勉強するんだろう」と民法のテキストを買って見たんです。そのテキストで「甲が乙に、丙が丁に」みたいなのを読んで、「これは勉強したくないな」と思ってしまって。でも指定校取っちゃったしな、うちの高校から1人しか取ってないしな、と悩んだんですが、「これはやっぱり違う」と思って、結局は東北福祉大に進みました。

実は、福祉だけは学びたくないとも思っていたんです。子どもの頃、親が列車の中で手話で話していると、みんなにじろじろ見られて、それがほんとに嫌だったです。妹はそれが嫌で、高校を出た後に家出同然で東京に出ていくぐらいだったので。父からは「通訳者として子どもが欲しかった」というようなことを言われたこともあります。だから、手話とか福祉とか、本当に嫌だったんです。

福祉事務所の人や手話のボランティアの人が、みんな口を揃えて言うんですよ。「章友くんは偉いね。お父さん、お母さんが耳聞こえないから、通訳してくれるんだね」って。「そういうために生まれたんじゃない」という反発もあって、福祉だけは学びたくなかったんですけど、いざ法学部に決まったら「何か違う」と思って。

それで、指定校の枠はごめんなさいと言って、ぎりぎりで辞退して、「東北福祉大を受けたいと思うんです」と進路担当の先生に言いました。後輩たちはその後数年間、指定校推薦の枠がなくなり、迷惑をかけてしまって、それは本当に申し訳なかったです。

でも、進学先を変えて良かったです。ずっと引っ掛かっていたので。

それまでは「福祉はボランティアで、ボランティアの延長に通訳とか白杖とか車いすがあるだろう」ぐらいにしか思っていなくて、福祉について嫌なイメージしか持っていなかったんです。その点は、大学するとき福祉に進んで良かったと思っています。東北福祉大で学んだことで、福祉に対するイメージは大きく変わりましたね。もし変わっていなかったら多分、「気の毒な人に施しを、少数派には手を差し伸べて」とか言っちゃっていたんでしょうね。でも、そうじゃないんだと気づいた。

高校の先生からは、「福祉について専門的に学ぶなら、日本福祉大学と日本社会事業大学と東北福祉大学ぐらいしか選択肢はない」と言われました。東北福祉大なら近いし、あと妹からは「卒業したら家を出る」と言われていたので、やっぱり父と母に何かあったときには自分が近くにいたほうがいいと考えて、仙台の東北福祉大を選びました。

◆大学卒業後の仕事

大学1年時にうつ病で1年間休学したため、1998年に大学を卒業しました。その後は白沢村の祖母の家で下宿しながら、隣町の三春町職員（一般行政職）で、2000年までの2年間奉職しました。

その後、半年後にたまたま縁があって、仙台市に新たにできた障害者就労支援センターの相談員となり、そこで10年弱働きました。当時はまだ、ジョブコーチや障害者就労が一般的には普及していない頃です。アメリカで、重度の自閉症の方々を「税の納付者にしたい」ということから始まった取り組みを、ジョブコーチという理論で日本へ持ってきて、横浜の「やまびこの里」というところがやっていたんです。その実践を仙台市もやろうという、かなり先駆的な取り組みでした。

石巻に家を建てたのですが、それは両親のためという意味のほうが強くて、自分は仙台のぼろアパートに長く住んでいました。

そこに勤めながら、通信制で精神保健福祉士や社会福祉士の勉強をし直したいと考えていたのですが、どうしても実習があって、職場（障害者就労支援センターの委託を受けた法人）の上司があまり賛成しなかったんです。「1カ月も休むのは非常識だ、趣味・娯楽なんだろう」と。「そんなのは、辞めてからやってくれ」と言われ、私も短気なので、「じゃあ辞めてやる」となって退職しました。

その後は、震災までの2～3年間、フリーランスで仕事をしていました。

仙台を中心に、精神障害の（当時の呼び方では）小規模作業所や、夜間の自殺防止の電話相談などのどちらかというところ、メンタルヘルスや精神障害の方に関わる仕事を優先しつつ、3つ、4つ掛け持ちをしていました。

震災がなければ、2011年の4月から、大学の後輩たちと一緒に福祉大とコラボして、当時珍しかった短時間デイサービスの会社を立ち上げる予定でした。フィンランドのブンネという楽器を使うデイサービスです。同じ4月から仙台で、精神障害の方を対象とした就労移行支援・就労継続支援B型事業所の管理者も兼務する予定になっていました。

2. 東日本大震災

◆震災当日 仙台から石巻へ

2011年3月11日。その日は普段通り、仙台市青葉区役所保護課で相談業務に従事していました。

震災のときは、青葉区役所の目の前の勾当台公園まで、庁舎4階にいた市民の方々を階段で下ろす誘導に精いっぱいでした。その後は何が起きているのかも分からなかったですし、地下鉄はシャッターが下りているので、覚悟を決めて歩いて石巻へ帰るしかありませんでした。

雪もバンバン降ってきていて、「これはどうしよう」と思っていたら、石巻からの特急バスがちょうど仙台で折り返すところだったんです。運転手さんが真っ青な顔をして、「石巻の営業所に連絡しているんだけど、電話も無線もメールも、何にも繋がらないから嫌な予感

がする。私は、無茶でも石巻に帰ろう、行けるところまで行こうと思うから、お客さんの中で石巻方面に帰りたい人がいたらバスに乗って下さい。お金はいらないから」と言ってくださって。私も、とにかく身一つでそのバスに乗って、1日半かけてやっと石巻市郊外の(蛇田)のイオンの近くまでバスで行きました。

周囲の田んぼも一面、津波に浸かっている、イオンの2階建ての建物がまるで海の向こうの島みたいになっていました。自衛隊の人に「ここから先はさすがに駄目」と言われてバスを降りました。

もう死んでもいいやと思って向こうに行こうとしたら、自衛隊の人にことごとく駄目と言われて。ボートとかヘリコプターとか装甲車みたいなのを次々と乗り換えさせられて、避難所の小学校に着きました。

それから1週間ぐらい、避難所に滞在しながら、とにかく歩いて家族を探しました。正確な情報はなかったんですが、「女川町は全滅だ」とか「牡鹿半島は駄目だ」とかいう話も聞こえてきました。

発災から1週間後、避難バスが石巻から仙台まで運行されるという話を聞き、朝3時から並んで、1番バスで仙台へ戻りました。アパートに戻って携帯電話を充電していたら、大学の後輩が車で来てくれたんです。ようやく橋やトンネルも渡れるようになって、故郷一渡波へ行くことができました。両親は死んでいるだろうなと覚悟して、遺体を持って帰ろうと思っていたら、何とか地元の公民館の避難所で生きてくれていたので、あの時は本当に有難かったですね。

◆「両親を連れて帰ってくれ」と言われる

家は海の目の前だったので津波に飲まれたのですが、父は泳げたので、何とか屋根の上で立ち泳ぎをしたそうです。母は福島の中の山の中、プールもないようなろう学校で育ったので、泳いだ経験はもちろんです。立ち泳ぎした父が何とか母親を抱いて助けて。屋根の上で、1日経って2階の屋根まで水位が下がってから、屋根から屋根へと渡り歩いて、2日かかってやっと公民館に着いたという話を聞かされました。

その避難所の公民館でようやく生きている父と母と再会したのですが、市職員や他の避難者から、「聴覚障害の両親をここに残されても困る」と言われました。「こんな状態の町になってしまって、町がもう二度と住めるのかも、女川の原因もどうなるか分からないときに、はっきり言って困る」と。「申し訳ないけど、連れて帰ってくれ」とはっきり言われました。

「じゃあ避難所にいること自体も迷惑ですよ」と聞いたら、「そうだ」と。「ご飯ですと言ったって聞こえないし、こういうルールにしたからねと言っても聞こえない。筆談する紙もないし、そもそもそんな余裕、私らにだってない」と。「だから、あんたが責任持って連れて帰れ。家督(長男)だろ、親の面倒見るのは当然だ」と言われました。

じゃあ連れて帰るか、と思ったのですが、行く当てがない。当てがないな、と真っ白の頭で考えていたら、携帯電話が繋がって、溜まっていたメールや留守番電話がまとめて来たんです。その中に、東京にいる妹の声で「もし万が一、3人のうち誰かでも生きていてこの留守番電話を聞いているなら、この番号に電話をするか、直接戻ってきてほしい。連絡が取れ

ません」というメッセージがありました。

妹にも連絡できないままだったんです。そして、後輩の車に家族3名乗せてもらい、何とか私が仙台に借りていたアパートへ帰りました。そこで3日か4日、食うや食わずで、泥まみれのまま過ごしました。だけど当時は、みんなそんな感じだったので。

◆東京に避難する

震災から2週間ぐらいして、県外避難者用の避難バスが動き始めたので、妹のいる東京に向かいました。忘れもしないですね。新宿西口のコクーンタワーの辺りで降ろされて、頭がどうなっているんだかという状況で判断が何にもできないので、妹にSOSの電話を掛けたらやっと繋がったんです。それで中野区の新井薬師という駅の近くの、妹のアパートに2週間だけお世話になって。その後区役所に行って、中野区が受け入れる最初の県外避難者ということで、建築中の都営アパートに入居しました。6畳と、台所含めて4.5畳と、3畳の物置きの部屋に大人3人、僕と両親とで暮らしました。その都営アパートには6年弱いました。

東京にいた間は、小金井市の精神障害者の方の地域活動支援センターで働いていました。実際は相談支援事業所でもあり、いわゆる昔の作業所でもあり、フリースペースでもあるような場所です。そこで非常勤の相談員として働きました。他にも、電話相談員や精神障害者向けグループホームの世話人の仕事したり、中央区の地域活動支援センターの正職員を兼務したりもしていました。

その後、2016年に良い職場があるというので石巻に戻ってくることになり、東京の勤め先は円満に退職しました。

石巻の職場は、ハローワーク新宿で偶然、求人を見つけたんです。「これは何かの縁だ」と思い、駄目元で応募したら採用されました。

そこでの仕事は相談支援専門員です。職場からは「あさって、6月1日から仕事に来れるか」と言われたのですが、石巻で住むところがなかったんですね。かろうじて生き残った親類も3軒か4軒しかなかったですし、狭い仮設住宅に押し掛けるわけにもいかないので、「何でもいいから、屋根がある所を探してほしい」と無理にお願いして、石巻で古いアパートを見つけてもらって、そこに住みました。職場までは歩いて20分でした。そのうちに10万円で中古車を買って、その後に転職をしました。現在はNPO法人ワーカーズコープの石巻地域福祉事業所に勤めています。

◆石巻に戻ってきた理由

震災後、私たち家族の場合は盆と正月ではなく、3月11日と9月11日に必ず石巻に来て墓参りをしていました。来るたびに親戚は、特に年配者ほど「こっちは気にしないでいいから。東京だったら何でも仕事もあるし、あんまり毎日毎日こんな景色見てたら具合悪くなるから、もう忘れて東京で楽しくやれ。若いんだから」と言ってくれるんですけど、やっぱりそうはいかないというか。

石巻の夢も、毎日毎日見ていました。内容は、震災の少し前、最後に実家を出た日の夜の

ことです。今も3日に1回ぐらい見ます。

あの日、いつものように洗濯物をいっぱい持ってきて、石巻の実家で洗って、ご飯作って食べて、親に「何かあったらすぐテレビ電話かファックスで連絡して」と言って、真っ暗な道を仙台に戻りました。その時は、ご近所さんの家もみんな普通に電気もついてたわけです。

で、次にその場所を見たのが2週間後、あの光景だったので。海の向こうに私たちの町があるんですよ。平屋の家はもう見えなくなっていて、そこにたどり着くまでも、がれきや遺体がある中を歩いて行ったわけです。精神科の先生には「PTSDの回復の仕方は色々あるけれど、あなたの場合はちょっと程度が重い」と言われました。ストレスで体調もかなり崩していました。

「半年に1回石巻に行くのも、症状を落ち着かなくしてしまうよ」とは言われていたんですが、でも、震災前にちゃんとお礼を言ったりお別れを言ったりしないままに、次に石巻へ行ったときは、誰もいなかったという感じになっちゃっている。「これでは駄目だろう。以前と同じというのは無理でも、3分の1でも5分の1でもいいから、ちょっとでもいいから町が、浜が再生しないと、これは浮かばれないぞ」と思ったんですね。

それで、東京にいたときから「帰らねば、帰らねば」という思いはずっとあったんです。家族3人は「もう諦めよう」と言っていたので、いつも「石巻に帰る、帰らない」で喧嘩になっちゃうんですけど。

でも、東京の職場で一緒に色々と教えてくださった宇佐美翔子さん（本冊子にインタビュー掲載）は、「いつかは帰らないと、多分気持ちが割り切れないんじゃないの」と言ってくれていたんです。それもあって、たまたまハローワーク新宿に行ったら石巻の求人があり、駄目元で応募したわけです。

ですから石巻で働くことは、自分にとっては一種のグリーンワークだと思っていました。今の仕事は、外回りをいっぱいする仕事なんです。外回りすれば、景色も街並みも、嫌でも見えるんですよ。そうすると、こっちに戻って来た当初にはなかった建物ができていたり、震災の時は悲惨な目にあった場所に、ちゃんと慰霊碑が建っていたりする。

それを見ていると、言葉が適切じゃないかもしれないですけど、やっぱり石巻には、悲しいときに一緒に悲しんで、泣きたいときに一緒に泣けるという人たちがいるというか。いちいち事情を言わなくても、みんな同じような思いをしてきた人たちなので。こっちに帰ってきて、PTSDのほうは落ち着いた感じですよ。

自分のグリーンワークと仕事がつながればいいなと思ってはいました。仕事の対象者の中にも、やっぱり家族がみんな流されて、自分だけ残っちゃったという方もいっぱいいるので。

◆両親は東京に

両親はいまも東京にいます。石巻に戻るまでは私も一緒に東京にいたんですけど、父とは3~4年、口を利いていないんです。石巻や、母の里の福島について、嫌な言い方しかしないので。

福島から野菜などが宅急便で送られてきても「誰にも見えないように捨てろ、捨てろ」みたいな感じなんですね。「放射能だらけだ、こんなの食ったら死んじゃうよ」って。良かれと思って言ってくれているんでしょうけど。ですから、家族もごたごたですね。少なくとも、私と父とはもう、全然コミュニケーションが成り立たないです。

母との関係は悪くないです。生き残ってから何度か、福島の100歳近いばあちゃんところに連れて行っていますが、年取ったってやっぱり娘は娘で母は母なので、手話なんか分かんなくても「よく生きてた、よく生きてた」って毎回毎回泣いているんですね。

母は福島か、お嫁に行った石巻か、どちらかで最期を迎えたいと言っているのです。父に何かあった場合は、母を石巻へ連れて来ようかなとは思っています。

◆女川町に引っ越す

職場の利用者の方の住居相談をする際に、自分が住む石巻のアパートが古すぎることも一緒に相談したら、「石巻市か東松島市かにこだわらないなら、女川町の町営住宅であれば、町民でなくても応募できるし、毎月募集しているのに誰も応募しないから、抽選なしで入居できますよ」と言われたんですね。それで応募して、今は女川町の町営住宅に住んでいます。

建ててまだ2年か3年の新しい建物です。2階建ての、民間のアパートみたいな立派な造りなんですけど空室が多いです。おそらく、入居者の半分以上は外国人の大家族です。アジアの方で、ほとんど魚加工関係の仕事に就いている方ですね。

震災前からの方もいらっしゃいますし、震災後に「人がいなくなったから、あなたの知り合いを引っ張ってきて」と会社から言われて、新たに日本へ来た人もいます。近くのドラッグストアやコンビニに行っても、外国の方はたくさんおられますね。

3. 活動とカミングアウト

◆「この職場は無理だ」と思った瞬間

三春町に勤めていた時、公務員を辞めた理由の一つが「カムアウトできない」ということでした。簡単に言うと、男で若くて役場勤めで新入職員となれば、「早いとこ町内で嫁さんを見つけて、子ども3人か4人、うち1人は必ず男の子を産んで、自分も町の消防団に入って……」という世界。男の職員は職場の野球部に入って、女の職員はマネジャーをする。そういう所で、お茶を出すのは女。

「この職場にいたら一生カムアウトできず、たぶん勢いに押されて好きでもない人と偽装結婚しちゃうんだろうなあ」と思ったら、これはやっぱりダメだと思ったんですね。結婚しないと一人前になれない世界なんです。「同期の何とかちゃんは駄目なのか」とか言われたりして、もう無理だなと思い、退職しました。

◆仙台で活動に参加

それで2000年に役場を辞めて仙台で仕事を始める頃に、仙台市の市民活動サポートセンターに行ったら、「HIVの啓発をしている団体です。ボランティア募集」という張り紙があ

ったんです。仙台に、まさかそんな活動をしている所があるなんて知りませんでした。インターネットも携帯もやらない人間だったので。

その張り紙を見て、ほおと思って連絡して行ったら、そこに団体メンバーの方2名がおり、その方とその後、様々な活動をさせてもらいました。

仙台にいたときは、Anegoの活動もやらせてもらいました。郡部から来る方々は、ちょっと前までの自分と一緒に、もちろん親になんか言えないし、会社にばれたらえらいことになる。そういう方々でも週末、仙台に出てくる時には自由に話せるように、と思ったんです。

東北HIVコミュニケーションズの活動もやらせてもらっていました。いっとき読書会みたいなのを立ち上げたこともあったんですけど、あまり長続きしなかったですね。アウトリーチの活動や、学会のお手伝いなどもしていました。色んな場所で“顔出しで活動してOK”という人が、当時はやはり少なかったので、「別にいいですよ」という感じで引き受けていました。

ゲイ男性のバレーボール大会でのアウトリーチ活動もしました。 Condomなどのセットを配ったり、仙台医療センターの先生方とタッグを組んで「HIV感染の心配がある人は、匿名でいいのでここに連絡してください」と伝えたりする活動です。中には「こういうのやられると、盛り下がるんだよね」みたいに言う人もいましたけど。ビーチでの啓発（ラブビーチプロジェクト）や、飲み屋さんを回っての活動などもしていました。東京のaktaがやっているような活動ですね。ドラッグクイーンのユニット「Anegoガールズ」に飛び込みで1日だけ参加したこともあります。

2009年の6月に仙台市市民活動サポートセンターで開催したIDAHO仙台2009「多様な性にYes!メッセージ展」では、実行委員長をさせて頂きました。

◆周囲へのカミングアウト

中学3年ぐらいから、自分は男性が好きだとは認識していました。でも、自分以外の人から「私も性的マイノリティの当事者だ」と伝えられたのは先述の団体メンバーの方々が初めてで、「自分以外にも本当にいるんだ」と思いましたね。「珍しいものを見るみたいになんかいいですか」と言われたのを、今でも覚えています。

それまで、自分のセクシュアリティについて、タイミングが合えば誰かに言いたいと思いつつも、でもそんな人いないと思っていたので。それが先の彼らとの出会いや活動することで「こんなにいっぱいいるのか」と本当に驚きました。

それからは、自分のセクシュアリティについて、全ての人に言うようにしました。「もう無理だ」と思って、家族や友達や親戚、あと聞かれれば近所の人にも言っていました。そうしないと、良かれと思ってお見合いさせられそうになるので。会ってからだと多分断れないし、来てくれる女性にも失礼なので。だから、「お見合いはいらないよ」と。 「何で？」って聞かれたら、「いや、こうで」という話をしていました。

カミングアウトした時、両親には「ふーん」と言われました。妹は、もっとそっけなかったですね。「いや、そうだろうとは思ってたんだよ」と言われて。妹はミュージカル女優だったり、ダンスを教えたり、他にもいろんな仕事をやっているんですが、「芸能関係で教

えたり一緒に出演したりする子たちって、レズビアンの子たち、ゲイの子たちが多くて、お兄ちゃんもそうだろうなと思っていた。わざわざ言わなかったけど」と言われました。

父と母はやっぱり時々混乱するようです。たまに「マツコ・デラックスさんみたいに女装する、ああいうことを章友はやりたいたいと言ってるのか」って、僕ではなく妹に聞いているみたいです。妹が「お兄ちゃん、女装はやりたくないみたいよ」と答えたら、「うん？」って。いまいち分かっていないのかもしれないですね。手話表現にもゲイとかレズビアンとかがあるんですけど、分かっていないのか、分かっているけど、はぐらかしているのか。

でも、カミングアウトして「お前はうちの子じゃないから出ていけ」とか、そういう話にはならなかったの、それは有難かったです。親類も皆そうでした。「やっぱり」って。「それじゃあ、何人紹介したって駄目なわけだ」と言われて、「すみません、もっと早く言えば良かったですね。失礼しました」って。

今はもう、結婚しろとは言われなくて、年齢も聞かれないですね。

地元だと言いくいと活動しにくいというのは、僕は全くないですね。周りには「やっぱり地元ではちょっと無理。地元には親がいるし、親が痛い目に遭うのは嫌だ」と言う人もいます。でも、僕の場合は地元で親がいても、多分言ってると思うんです。というのはカミングアウトした時、「おまえは私の子じゃない」みたいに言われる関係でもなかったの、そこは家族やきょうだい、親類に本当に恵まれました。

◆東京の勉強会などにも参加する

2000年後半以降、積極的に政治家や、様々な活動をしておられる人たちが開催される勉強会へ参加させて頂きました。「政治が変わらなきゃ世の中変わらない、法律変えなきゃだめだ」と思っていた時期ですね。当時は仙台市の就労支援センターにしながら、毎週、土日は夜行バスで東京に通っていました。ピアフレンズや、パフスクールのイベント等にも参加させて頂きました。

AnegoはAnegoで、HIVコミュニケーションズはHIVコミュニケーションズで、色々と活動してはいるんですが、広がっても隣の山形とか岩手、福島くらいですよ。青森で映画祭が始まったり、秋田ではESTOが活動していたりして、東北六県で活動は行われているんだけど、やっぱり中央のことが分からないといけないのかな、と感じていました。東京のことが分かってくると、世界の趨勢についての情報も、色んなところから聞こえてくるので。「東北だけが陸の孤島になるのは嫌だな」という思いもあったので、周りには「半分遊びだ」と言いながら、ちょっと強行軍をしていましたね。

仙台だと、どうしてもみんないい人ばかりというか、お互いに「分かる、分かる」みたいなことを言いあうのですが、東京へ行くと色んな考えの人がお互いにずばずばと言う。「そこは言わないでおこう」というようなことでも、遠慮しないんですよ。やっぱり東北の文化と違うな、思っても言わずに黙っているのは東北人の特徴なのかな、とったりもします。

東京通いは、団体ではなく個人でやっていたことです。東京通いをしているうちに、色んな所とつながれたらいいな、ドロップインセンターみたいな、相談センターみたいな場所を東北に作れたらいいな、と考えるようになりました。サークルとしてのAnegoとも、HIV

に特化した東北 HIV コミュニケーションズとも違う、今でいう ZEL みたいな場所を作れたらいいかなど。これは今も考えていて、石巻に作ったらどうなのかねと話したりはしています。

◆職場でも活動のことは伝えていた

職場でも、こうした活動をしていることは全部言っていました。例えば NPO 法人や社会福祉法人だと、土日祝日にイベントをすることも結構あるんです。そのとき「何で毎回イベントに来ないの、感じ悪いな」みたいになると嫌なので、こちらから「実はこういう活動をしていて」と伝えたら、「そうなんだ、じゃあ無理すんな」と言ってもらえて。

自分が当事者だということも話していました。同僚のスタッフにも、利用者の方にも伝えていましたね。自分が当事者だと伝えると、色んな人から相談を受けたりもしました。「姉が多分そうじゃないかと思うんですけど、私は何をしてあげられるんでしょう」とか、「私、男にも女にも興味がないんです。親に言ったら『おかしなことを言うな』と言われて」とか。

精神科クリニックが経営する階下の喫茶店の店長をやっていたときは、院長先生と副院長先生から「君と同じように悩んでいる子がいるから、今度喫茶店にさりげなく連れてくるね」と言われたりして、それで出会えた人も結構いました。

自分が当事者だとカミングアウトしても、他人に何か言われる筋合いはないし、言われたら言われたで正論を返せばいいか、ぐらいいに考えていました。でも、嫌なことを言う人は、本当に誰一人いなかったです。この話をすると、みんなに羨ましいと言われます。「これだけたくさんの人に言って、誰も笑い者にしたり、小ばかにする人いないんだ」って。だから、多分恵まれていたんだなと思いますね。

当時は本気で政治家志望だったので、自分のカミングアウトは啓蒙活動の一環だという思いもありました。カムアウトは自分自身のカムアウトであると同時に、小さくとも社会を変えていく一つの方法だと考えていたんです。職場でも、どんな書類にも「男、女」と性別欄があったりして、そうしたことへの反発もありました。啓蒙とか、一種の義務感といった感じでカミングアウトしていましたが、咎められることもなかったです。

◆政治への思い

選挙に出ることにも興味がありました。それもあって、どう法律を作るのか、議員立法はどうしたらいいのかや、選挙のいろはについても勉強していました。合宿などでも色々と教えてもらったりしながら、いつかは議員秘書の勉強をして、資格を取りたいとは思っていました。

カムアウトして選挙に立候補することも、誰かがやらないといけないと考えていました。東京でさえも、少なくない当事者がクローズという感じだったので。「これじゃいつまで経っても世の中変わらないよ」と思っていた頃に、尾辻かな子さんや石川大我さんが出てきたりしました。

立候補するとしても、石巻の市議会議員から順番にやっっていこうと思っていました。今思えば大それた夢でしたね。

社民党と一緒に勉強していた方が、その後、伊賀市の市議員に最年少で当選したんです。そしたらあつという間に、伊賀市で同性パートナーシップ宣誓制度ができた。当時一緒に勉強していた方たちが、あちこちで頑張って市議だの県議だのやってくれているので、すごいなと思っています。

素性がばれると嫌だから地元ではなく国政に出ようとか、知らない町で立候補しようとか、そういうのは一切なかったです。どうせ喧嘩を売るんだったら、ふるさとからやってみようと思っていました。

でも色んな人から「あなたは政治家は向かない。あなたの気持ちの弱さじゃ、たぶん持たないわよ」みたいなことを言われて、「じゃあ向いてないんだな」とも思ったんですね。だんだん年取ってきて、法律を作ったり運動したりするのは、別に議員じゃなくてもできると分かってきました。それこそ裁判を起こすのも一つのやり方です。政治家にならなくても色んなやり方はあるのかなと今は思っています。

ただ、今も地方議会の選挙に出ないかと声を掛けられることはあるので、まだ分からないですね。議員になったらなつたで、やりがいはあるでしょうし。

4. 震災後の活動

◆震災が転機になる

今は ESTO の副代表を務めています。代表の真木（本冊子にインタビュー掲載）と初めて会ったのは、仙台の活動に参加した翌年くらい（2001 年頃）です。縁があつて顔合わせをして、「何かのときに手をつなげるかもしれないし、遠いといっても秋田と宮城は同じ東北だから仲良くして」と言われて。あと、自死予防についての話も聞きました。「じゃあ、会費払えば ESTO の会員になれるんだ」と会費を払ったのが最初です。当時はお金を払うだけの会員でしたが。

震災の後、仙台の団体とは次第に距離を取ることになりました。

震災はかなり色んな意味で転機になりました。残念な転機になつちやつたんですけど。でも物は考えようで、震災があつてたまたま東京に避難していた時に国の事業の電話相談業務が始まることになり、勉強会に参加しているうちに「相談員をやらないか」と言ってもらって。相談員になって、全国の色んな方々と出会う中で、「自分のように避難している立場について、分かってくれる人もいるんだな」と思うこともあつて、やつと救われた気がしました。

ESTO での活動を本格的に始めたのも、東京に避難していた時期からです。当時の ESTO は少なくとも年に 2 回から 4 回、東京でも勉強会や交流会みたいなのをされていて、そのコアスタッフという形でした。SRS（性別適合手術）について体験談やノウハウを本にまとめたという企画があつたり、相談の業務もあつたりしました。東京でのイベントに加えて、年に何回かある秋田や仙台での ESTO のイベントや、青森の映画祭にも、手伝い要員のような形で勝手連としてあちこちに行っていました。その後、ご縁があつて、現在は ESTO の副代表として活動させて頂いています。

◆石巻での活動「サークル・カメレオン MIYAGI」

真木も「大っぴらにはやれないけど、でも故郷の町でサロンみたいなのをやってみたい」と言っていたんですね。「内海さんもそうじゃないの？ せっかく石巻に戻ってきたんだから。いつも東北の人は『仙台にしかない』みたいなことを言うけど、『いやいや、石巻にもあるし、気仙沼にも、一関にも、郡山にもいわきにも会津にもできて』というほうが良いでしょ？ 物は試しで、一回やってみない？」と言われて、今年（2019年）の5月に石巻でESTO主催のLGBTユースのサポートを考える会「サークル・カメレオン MIYAGI」を始めました。場所だけ押さえて、誰も来なかったら来なかったでいいという感じで始めたら、1人か2人か来てくれたので、それはそれで良かったのかなと思っています。

もともとESTOの「サークル・カメレオン」は「親子交流会」のリニューアルで、ESTOが始まった頃からずっとやっている活動です。僕が東京に避難していた時も勿論、東京で開催されていました。

石巻では、他に震災後に「石巻パシフィック Rainbow」という団体ができて交流会活動をしておられたのですが、事情があって活動を休止しているので、何とか代表の方とお話して、組織自体を残すことができないかなとも考えています。

5. 東北の地域性

◆プレイヤーが限られていた

震災後はセクシュアルマイノリティ関係の団体やグループがたくさん立ち上がりましたが、震災前の仙台では、やはり活動するプレイヤーが限られていた印象があります。何かイベントがあったりすると、いつも同じキーパーソンの人がいる。

逆に言うと、この人たちが何かの都合でやれなくなったり休むとなったら、何にもやれなくなっちゃうのではと感じていました。クローズの人は、どうしても人任せというか、「顔出せない、名前出せない、だから何もやれないから、あなたたちがセッティングしてね。セッティングしてくれたら、後から混ざるから」という部分があるのかなとも感じましたね。協力はしてくれるんだけど、どうしてもカムアウトしている特定の人に負担が集中してしまう。

◆性的マイノリティへの無理解

ジェンダー問題にずっと取り組んできたという地元の女性議員に先日会ったのですが、「あれ？」と思いました。地元のトランスジェンダーの人が投票所入場券の性別表記について相談していたのですが、「こういう人、女川にいないから分からないんだよね。男か女か」と言われて。「内海さんだって分かんなかったでしょ？ どういう経緯でこういう人と知り合ったの？」って言うから、「議員、悪いんだけど僕、ゲイなんだよね」と伝えたら、「え？ え？ いや、そういう人いなかったよ、女川には」と言われたんです。

「ちょっと待って。統計では左利きの人より多いんですよ」と言ったら、「え！？うちの息子にも娘にもそんな友達とかいなかったよ。私のきょうだいだって、結婚して子どももい

るんだから、そういう人じゃないと思う」と言うので、「分かりませんよ。僕だって偽装結婚、ぎりぎりしそうになって、危うく1人の女性に迷惑掛けるとこだったんですよ」と答えただんですが、どちらかといえば、ジェンダーに理解があると思われている議員ですらこれか、と思いましたね。

私も昔、石川大我さんの『ボクの彼氏はどこにいる？』という本を買おうとしたら、本屋の店員さんが読み間違っただけで『ボクの“彼女”はどこにいる？』って、これ幾らでしたっけ」という、そういうレベルのところまで育ったわけです。故郷の浜でも中学生や高校生で当事者の子も絶対いるはずなのに、たまに列車に乗ると、列車通学してる男の子同士がじゃれ合っただけで「おまえ、ホモだろ」とか「きもいな」とか未だに言ってる。「変わってないわ、ここ」と思います。ただ逆に、初歩の初歩すぎるのところからスタートなので、あまり最新の世界の趨勢とかが分かっているなくても変えていけるから、良い部分もあるのかもしれないですけどね。

私はやはり、ふるさとを変えたいというのが一番ですね。「こんなとこに住めないから、仕方なく東京行った」なんていうのは、自分ぐらいの世代でもう終わりにしたいです。パソコンやタブレットがあれば世界中とつながれる時代なので、地方だから住めないというのは、もう終わりにしたいなと思っています。

◆男性社会の無理解

投票所入場券の性別表記について、選管に申し入れに行ったときに出てきたのは、副町長と選管の委員長と総務課長でした。課長補佐が事務局のように取り仕切っていたんですけど、やっぱり事前に話をしていないと、話が通じない。そもそも「きょうの集まりは何なんだ」という話になって、課長補佐がいろいろ丁寧に説明するけど、通じない。「これの何が駄目なの？」「だって、男と女しかいねえのに、何が悪いの？」というレベルなんです。「いやいや、そう簡単なものではなくてですね」と話をすると、「何だか難しいけど、そういうのってここでは聞かねえよな」というのが最初のリアクション。課長補佐は分かってくれました。すぐに話が通じました。だけど、そこから上に行くと全然通じない。

「何だか分かんないけど、要望書をもらえばいいんだろ」みたいな。「NHKとか朝日新聞とか河北新報とかみんな来たから、こういうの（写真撮影用に要望書を手渡すシーン）やればいいんだろ」みたいな感じで。

要望書を渡したら、「分かるよね。内海さんも役場の人だったなら分かるよね」みたいなことを言うてくるんです。「だって、条例とか例規集を変えるのが大変なの。別に残したって良いでしょ」「何もそんなの（投票所入場券）で、誰もあんたのこと男だ、女だって言わないから」って。

「いや、いや、そうなのかもしれないけども、私は百歩譲ってそれで良くて、でもそれじゃ困るといふ町民もいるんです。そういう人は今までいないってさっきから10回ぐらい聞いたけど、いるんです」と話をしたら、ようやく「じゃあ、じゃあ、そんなに言うんだら、じゃあ」って。

こういう時に、表に出てくるのはもちろん、全員男性です。50～70代位の男性たちが町

社会、村社会を仕切ってますから。

母のふるさとも、「男が墓を守って、女は嫁に行つて。結婚しないのは何か病気でもあるんだろう」という世界です。「子ども産めねえのか、恥ずかしい子だ」って。

◆クローゼットとカミングアウト

今は、クローゼットの人はクローゼットで、無理にカミングアウトしなくても良いんじゃないかなと思うようになりました。必要性を感じれば自ずとカミングアウトするでしょうし、あとは多分、時間の問題だと思うんですね。隠さなくちゃいけない時代がこれから50年ぐらい続くかという、そんなことはないと思うので。今、大学生や高校生ぐらいの子たちが社会で力を持つ、30代、40代ぐらいになった頃、どこでも繋がれるような時代になって、正しい知識も持てるようになれば、オープンとかクローズとかというの、笑い話になるんだろうなと考えています。

東北は特にクローゼットに配慮した活動が多いかという、それは多分関東に行つても四国に行つても一緒だと思うんですね。人口比の問題、声を上げる方が多いか少ないかの違いで。あと、東京だと仲間が多いというので、カミングアウトしやすいというものもあるのかもしれないですね。特に地方から上京する人は、勝手に東京への期待値を高く持っている部分もあるので。

仙台は東北六県から吸い上げて、仙台は東京に吸い上げられる。ストロー現象ですよ。だから東北の活動でキーパーソンになりそうな人がいても、卒業と同時に進学・就職で県外に行つてしまつて残らない。ESTO代表の真木とも、「この繰り返しは、いい加減嫌になつてきた」と話しています。

同じ東北でも、仙台と他の地域はまた違うでしょうね。大学で仙台に進学する子もかなりいますから。これを言うと怒る人もいますが、山形市や福島市の人たちは、やっぱり仙台圏域だと思つているので、意外とオープンな方が多いなという気はします。「仙台に行けば味方が多い」という安心感みたいなものがあるのかなとは思いますが。

仙台が受け皿になっているんですが、ただ受け皿が小さすぎてあふれちゃうので、そこから東京と世界中に流れていく。そこを変えたいんですね。

◆東北のゲイ男性をめぐる環境

Anegoや東北HIVコミュニケーションズは、断然ゲイ男性がメインでした。仙台以外の団体は、シス男性ゲイがメインのところが多くなくて、戸籍上女性の方がやっているところが多いイメージは何となくありますね。

セクマイの中でもゲイ男性が、一番笑いのネタにされやすいからかもしれません。プライドが高い人も多いです。だから、人から笑われるのが大の苦手というか、しなやかな強さがないというか、言われたらポキンと折れて立ち直れないみたいな。トランスの人はトランスの人で苦しいだろうし、バイセクシュアルだって、レズビアンの方だって色々あるんでしょうけど、個人的には、ゲイが一番早く世に出た分、笑いのネタにされる部分も多いのかなと思います。だから、特に地方ではゲイ男性が活動の中心になりづらいいのかもしれない。

あとゲイ男性は、フットワークが軽い人も多いんじゃないですかね。地方に住んでいても、仙台や東京のイベントに参加する。仙台で朝早くから始まるゲイ男性のバレーボール大会にも、青森の人が前の晩から車飛ばして参加したりしています。あと新宿2丁目のaktaとか箱があるから、地方に住んでいてもゲイの人は仙台や東京に行って、動いた先で色々やっているのかもしれない。その方が親にもバレないし、セーフティなのかなって。

さっきの話じゃないですけど、地方だと「どうして彼女をつくらないの？ 嫁さんいないの？ おまえ、どっか悪いんだろ」みたいなことを言われますから。そうした環境と、ゲイ男性のプライドの高さが相まると、余程こちらが頑張って仕掛けを考えないと、心を許して集まってくれない。地方で何かイベントをやるといっても、そこに住んでいるゲイ男性がワーって来るといふふうには、なかなかかなりづらいだろうなと思います。

個人的な感覚として、ゲイの男性のほうが、やっぱりかたくなな人が多いんじゃないかなと思いますね。地元では、自分がゲイだとは絶対に言わない、言いたくない。そんなのばれるぐらいなら、みたいな頑なさがあるのかなとも思います。

6. 震災と活動

◆震災で生じた迷い

大震災がなければ、仕事もプライベートも交友関係も含めて、全く違うように生きていたんだろうと思うんです。震災前、「この人に付いていこう、この人となら何かが開けるんじゃないか、光がくれるんじゃないか」と思っていたセクマイの有力者と思しき方々と色々な活動をしてきましたが、東京に避難した後のそれぞれの方のコメントやアクションは様々でした。本当に心から許し合えて、一緒にミッションをやっている人がどの人で、表面だけの人がどの人なのかというのを選別できたという意味においては、良かったなと思います。

でも、知らないほうが幸せだったかもしれないですね。何度も落ち込みました、やっぱり。一方で、気遣ってくださる方の中には「もったいないよ、内海さん」「戻って一緒に活動やったらいいんじゃない？」と言って下さいました。しかし、それはあり得ない選択肢でした。あの日から、死体を踏み付けながらやっとの思いで県外避難して、今度は避難先でまたふるさとのことをぼろくそに言われて、職場でだって色んなことを言われて、その揚げ句、「この人なら分かってくれているだろう」と思っていた人たちから久しぶりにアクセスがあっても、県外避難した選択を一方的に責められたり。「もう無理だな」と思いました。

あともう一つは、「こんなことに時間を費やしている場合ではない」とも思ったんです。生きるか死ぬかというときに、LGBTがとか、ナビシャツをどうしましょう、こうしましょう、お手洗いの工夫が必要だとか、ふざけんなどという話を何度もしました。だって、本当に困っているとき、そんなこと言ってる場合じゃないから。「避難所でゲイだとばれることが不安でした」と言う人もいますが、それは安全な避難所だからだろう、とってしまいます。津波が来なかったような所だからだろうって。「おにぎりなんか飽きたから、あったかいもの食べせろ」とか、そういう話じゃないと。このまま3日、4日、支援が来なかったら、ど

うなっていたら。家族の中で自分だけ助かった人だっていっぱいいたわけで、そんな人たちがふるさとにわんさかいる状況下で、東京の人たちに「当事者同士協力し合って何とか助け合いましょう」とか言われても……。 「何を言ってんだ。今やるべきことは違うだろ」という思いはありました。

だから、活動をやめようかと思うことも、正直何度もありました。それを引き止めてくれたのが、東京での共生ネットのメンバーの皆さんとの出会いでした。「色んな人がいていいんだから、ふるさとを助けたり手伝える人は、他にもいっぱいいるはず。いないなら一緒に探すから。だから、1人で全部やろうと思わないで、諦めないで、何とか今は東京で踏ん張ろう」というふうに色んな方に言ってもらって、本当に救われました。

ESTOが2017年に作成した「多様な性を生きる人のための防災ガイドブック」の編集作業に、私は関わっていません。正直、「すぐに仮設住宅や海から離れた他の避難所などにアクセスできた人たちは幸いだったと思います。しかし、本当に地獄のような現場も見ないで何を言ってるのか？ 例えば、南三陸とか気仙沼、石巻に来たらいい。岩手の沿岸、歩いたことあるの？ ここに避難すれば大丈夫だっていう避難所すら、何百人って亡くなっている。そんな大災害時に、ナベシャツが何枚足りないだの、生理用品を男が配るからもらいにくかったとか、ふざけるな」という思いからです。偏っているかもしれないけど、正直なこの想いは他の編集していたメンバーの一部には伝えました。

◆「何の役に立つのか」という無力感

僕が過ごした避難所は石巻市立向陽小学校で、1年3組の教室の冷たい床に座り込んで1週間。両親を探して毎日十何キロ、二十何キロと歩き回っていたわけです。そういうときに、「セクマイの活動や福祉の仕事をしていても、何の役にも立たないんだな」と情けなくなりました。だから、こういう活動も、福祉も、一切やめようかなと考えたりもして。だって、そんなことよりガソリン運んでくる人のほうが有難いんです。パン運んできたり、お風呂作ってくれる自衛隊の人とか、見付からない人を一生懸命探してくれる警察の人とか、消防の人とかのほうが。

だから、情けなかったですね。福祉は人が生きる上で、人が人間になる上で欠かせない要素だと思っていたし、その大きな柱の一つにセクシュアルマイノリティというのはあるものだと勝手に確信を持ってやっていたけれど、「こんなの別になくても困らない」と思ってしまっただけ。石巻で、空襲や原爆が落ちたような光景の地を歩きながら思ったのは、「ほんとに自分は使い物にならないんだな」ってことでした。

その後、東京に避難して最初に行ったある団体の会議のときに、何かもめていたんですね。何でもめていたかというのと、「この文面がこうで」とか、「厚生労働省に上げるのはこういう態度でいたほうがいい」とかで。「そんなことでもめてんだったら、がれき処理でも何でもいから、おまえら現地に行けよ」って、腹が立つやら情けないやら……。でも、そこを引き止めてくれたのも、共生ネットに集ういろんなセクシュアリティの方々だったり、アライの方々だったりでした。

落ち着いて振り返ると、避難所におけるセクシュアルマイノリティに対する配慮の要望

書とかを作ろうと言ってくれた人たちがいたんだというのは、今にして思えば有難いことだと思います。あのときは自分も、まともな神経ではなかったですからね。数日前まで普通に生活していた人間とは思えない亡骸がいっぱいがれきの中にそのまま転がっていた中で1~2週間ぐらい過ごせば、ちょっとおかしくならない人はいないと思います。臭いもそうだし、忘れられないです。

◆まずは命がなければ

被災地が一番危なかった時期に、ESTO 代表の真木が危険を顧みず、当てもなく会員の住所を一軒一軒、車で回ってくれていたということを、後から知りました。私の家が流されたというのも、もちろん探し当ててくれて。

だから、セクマイも大事だけど、命がなければセクマイとか人権の話にもそもそもならないので。以前は「セクマイのことをやるのは当事者じゃないと駄目だよな、分かるわけないよな」と勝手に思っていたのですが、そうじゃないなと思い直しました。アライでも当事者でも、匿名でもオープンでも、活動家であってもなくても、人間として当たり前のことがやれる人かどうかが大事なんだな、と思うようになりました。

そんな中、ESTO という団体が、一番苦しかったときに一緒に動いてくれて、心配してくれて。何度も何度も東京に来てくださって、色んな人を紹介してくださった。なので、今もお付き合いさせてもらっているという形です。ESTO は、リーダーに立っている人の人生観というか、人間を見る目線というか、そこに惹かれたところが大きかったですかね。

◆避難所で多くの人の話を聞く

自分がいた避難所、向陽小学校の1年3組では、色んな人から話を聞きました。

当時の避難所は、隣の教室もどこも阿鼻叫喚で、小学校には次から次に生きている人と遺体とがへりで運ばれてくるような状態でした。みんな大変なんですよ。だけど、みんなお通夜みたいに教室に体育座りしていて。石巻ではふだん降らない雪が毎日毎日降って、とにかく寒いんですよ。

そんな中、「何か話すか」という話をみなさんにしたんです。「黒板もあるし、自己紹介ぐらいしましょうよ」と。学級委員みたいに、「じゃあ、僕からやります」と始めたら、教室にいた20人ぐらいの方々が、少しずつ自分がここに逃げるまでのことを話し出してくれたんです。よほど言いたくなかったことも相当あるだろうなという、えぐい場面も含めて。そこでいっぱいワーワー泣いちゃう方もいれば、呼吸が荒くなっちゃう方もいて。

だけど、それがきっかけになったんですね。私はその時、両親を探して毎日10時間ぐらい歩き回っていて。「こっちの橋も行けなかった、こっちのトンネルもまだつながらない、旧北上川の向こう岸に行けない、ちきしょう」と。また避難所の学校に戻ってくる。それで夜、どうせ眠れないし、ろうそくなんかなくて夜空のほうが明るいので、外に出て。で、外でみんなの話を一人ひとり聞いていったんです。聞くぐらいしかできなかったの。「お兄ちゃん、何の仕事してんの？」って聞かれて、「生活保護のワーカーだよ」「へえ」と。

そんなことをして「いや、こうなんだ、ああなんだ」という話を聞いているうちに、喧嘩

が激減したんです。それまでは、「あの人はバケツリレーにも出ねえのに、何で私ばかり出されねげねえの」「女の人がおにぎり握んねげねくて、何で男の人は食うだけでいいの。おがすいべっちゃ」と男の人に食って掛かるおばちゃんもいれば、「おなごなんだから、黙ってやれっこの」みたいに言っている男の人もありました。それが、話をしているうちにだんだん、「あの人もえらい目に遭ったんだ」「あら、何だ、その人と近所だったんだ」とか、「あれ？ あのどこさ逃げたか分かってる？」とかってという話が始まるんですね。

そんなことを1週間繰り返していたら、だんだんみんながクラスメートみたいになってきて。もめるってことがなくなりました。

3日目ぐらいに渡された水が、3人でキャップ一杯ぐらいの、ほんの少しだったんです。多分何にもしてなかったら、「ふざけんな、この」「俺が飲むんだぞ。俺が先だ」とかかってなったと思うんです。だけど、うちの教室では「いいから、いいから、飲まい」「大丈夫、私、いいから。もう少し頑張っから」みたいにみんなて譲り合って。「明日になったらまた雪降っからいいんだ、いいんだ」って。そして、寝たきりの認知症のおばあちゃんや、逃げてくるときに足にでっかい釘刺しちゃったお母さんとかに水をあげて、もめなかったんです。

4日目、5日目ぐらいには、向かいの公民館に備蓄している米をみんなて供出しました。「許可ないけど、もういいや」って窓ガラスぶっ壊して。その時も、ほんとピンポン球みたいなおにぎりでしたけど、それでももめなかったのはみんなのおかげかなと思っています。

僕、東京に避難して最初の3~4年は、その教室にいた人たちの機関紙を出していました。今どこで何をしてるか。誰々さんは、お蔭様で仮設第何住宅というところに入れたとか、旦那さん（の遺体）はお蔭様で見付かったから供養できたんだよとか、息子がやっと見付かったんだ、葬式もまだできないからあれだけど、とかってみんなの情報を集めて、手書きの機関紙を作っていました。

避難所で色んな人の話を聞いて、僕が救われたんです。

◆自分だけ避難したという思い

「僕だけ逃げた」という思いは消えないですよ。今も言われますよ。親戚なんかも悪気があるわけじゃなくて、「一番ひどいときに章ちゃんたちはここから離れたもんな。それで良かったんだ。あんなとこにいたら、頭がおかしくならないほうが変だ」って言います。友達とかにもやっぱり悪気なく言われますもんね。「何の不自由もないとこに1人だけ逃げたんだろ」って。それはセクマイの仲間たちからも結構言われました。

でも、それより良い選択肢が、当時の僕には、あの時の頭の中にはなかった。もっといいやり方があったかもしれないんですけど。

◆震災後に団体が増えた

震災の後、東北に色んな団体ができたことは、私は、とてもいいことだと思います。

女川町もいま、外国人の労働者の方いっぱい入ってらっしゃるんですが、被災地って言われるような東北とか、特に福島県はそうですけど、移住してくる人が本当に有難いですよね。このままだと町も村も立ち行かなくなっちゃう中で、知らない人たち、縁もゆかりもなかつ

た人たちに来てもらうというのは、とっても大事なことだと思います。そうなったときに、東京や大阪にはあるけど、地方に来たらあれもない、これもないみたいになると、せっかく外から来てくれた人も多分1年持たないだろうなと思うんです。うんざりして「遊ぶところもないし」と言われそうな気がする。だからそういう人たちのためにも、新しくできた色んな団体が色んな活動をするのは、とても良いことだと思います。

あちこちでできてきたというのは、逆に言うと、新しい町をつくるということ。この女川町なんか、まさにそうなんです。震災で、ほぼほぼ町の形がなくなっちゃったので、新しくつくるしかない。そうなったときに、今までなかったものがぼんぼんできるというのは、とってもいいこと。「NPO法人って何だ?」「ボランティアって何だ?」っていうようなお年寄りにも説明を繰り返すことで「あー」って納得してもらえる。そういうのがだんだん広がっていくのは、良いことだなと思っています。

◆それぞれの地域の拠点が連携する

ただ、これもやっぱりさっきの話と一緒に、キーになる人が抜けちゃったときに、「クローゼットならいいけど、自分が中心になって活動するのはちょっと」という人ばかりになると、やっぱり目立たなくなっちゃうとか。仲間を探している人同士がつながり合えなくなっちゃうのもつまらないので、僕は個人の連合型みたいなのをつukれないかなと思っています。

やっぱり東北は、それぞれの地域が遠いんですよ。宮城から秋田や青森に行くのは、東京の人が埼玉に行くのとは訳が違うじゃないですか。なので「みんな集まれ」って言って、東北六魂祭みたいに六県から一カ所に集まるとなると、ほんと大変なんですよ。

だからそれぞれの地域に、ある程度の拠点になるような、リーダーシップを取ってくれそうな団体なりキーパーソンがいて、その人たちが何か運営上で困ったことがあったり、煮詰まっちゃったり、ぶつかったりしたら、うまいことお互いに連携して、コーディネートできれば良いなと。けんか別れしたり、分裂したり、そんなことばかりやっていると「これだから東北はいつまでたっても駄目だ」となってしまうので、そうならないように、ある程度の所にそれなりの方を置いていけば良いのかなと。東北は昔から「東北大陸」って言われるぐらい、いい意味で蝦夷(えみし)の文化もアイヌの文化も残っていますから、どちらかという先進的なものを、もともとそんなに嫌がる気風の所ではないはずなんです。

だから、何でもかんでも東京のまねをしなくていい。東北には東北のやり方があると思うんです。広過ぎて集まれなとか、この地元には経験値がないからとか、そんなこと言わないで、寛容な精神は他の地域よりよほどあるんじゃないかなと。

ですから、新しい団体が立ち上がっていくのはすごく心強いし嬉しいですけど、守り育てるための保険というか、後ろ盾みたいな方がいてくださるといいかなと思いますね。ちょっと経験があるとか、ちょっと年齢を重ねているとかっていう人が、そういうところにいてくれば、すごく心強いんじゃないかな。「昔、こういうやり方があったよ」とか、「俺んときこうだったよ」とか、他愛もない話でも言える人がいると良いかなと。新しく立ち上がった団体は、やっぱり最初のうちに路線がぶつかったり、感情がぶつかったりとかもあるみたいな

ので。

◆しがらみのない人たち

新たに団体がたくさんできたことは、震災と関係あると思います。「新しく作らなくてはいけない」という気風が、何かを取っ払ってくれたんじゃないかなと思いますね。

復興、復興っていうけど、ぶっ壊れたものは復興にはならないんですよ。女川に限らず、新しく作らざるを得ないので。

ボランティアで女川に来て、移住してくれる人もいるわけで、IターンやUターン、あるいは仙台へのJターンの人が、震災を機にいっぱいいるようになった。そういう人たちはしがらみもないし、それまでの地域の常識に縛られないので、新しい動きに繋がっていると思います。

津波の前までは、区長の誰れさんを知っているかどうかとか、議員の誰々さんにこのぐらいしないとそもそも議員が議会で取り上げてくれないとか、そういう信じられないような文化が普通にあったんです。だけどそれも、震災でみんなぶっ壊れたわけですよ。だから、やりやすいと言えばやりやすい。

ただし、やっぱり地の利が分からないとうまくいかないし、これまでの経緯みたいなものある程度知らないと、という部分もあります。今まで活動家として動いていた人が、全くいないという地域でも、それなりに自負を持ってやっている人たちもいるので。だから新しく来た人も、そういうことをある程度は頭に入れた上でやったほうが、喧嘩にはならない。仲良くやろうということですね。

7. 成果と課題

◆自死予防

ESTOの活動としては、やはり最初から自死予防というのを掲げていますので、その点でケースワーク、ソーシャルワーク、電話相談をやれているっていうのは、一つの成果だと思いますね。代表の力がすごく大きいと思います。

あと個人的には、東日本大震災の前と後で、自死予防というテーマに対する思いみたいなものが、微妙に変化したのかもしれないなと思いますね。セクシュアルマイノリティの人権を守れというのは、どこの政党でも簡単に掲げることができるんですが、じゃあ実際、「お金がなくて苦しい」と言っている同性カップルの方々に何がしてあげられるかという、制度に精通していなきゃ使いものにならない。東京にいたときも、LGBTと貧困というテーマで私も呼ばれて話していましたが、これはやっぱり大きい問題だと思います。

◆今後やりたいこと

東北の団体同士、もう少しネットワークに重厚さがあつたほうが良いんだろうなと思いますね。その方が、やる人も上に立つ人も、楽にはなるだろうなという気はします。ある程度、組織立ってきたら、各団体が回り番で色んなイベントをしたり、ケース共有をしたり

もできるようになってくる。そうすれば、議会などへの意見具申とかも、色々な所に出せるのかなという気はします。ただ、聞こえてくるのは、あの団体とあの団体が仲違いしたとか、そういう話が多いので、まだ早いかもしれないなとも思いつつ、ですが。

でも、津波で実感しましたが、人間、いつ死ぬか分からないから、やっぱり思い立ったときにやっておかないと絶対後悔するなと思ったので。だから勝手に目標を立てています。

あと5年ぐらいは生きるとして、それまでの間に何か形にしたいなと思っています。有料にするかはともかく、ワンストップで何かができたり、話を聞いてあげられるような資源をつくれたらいいなと、今は考えています。

地域のキーパーソンは、どうしても負担が大きくて、疲弊している部分もあると思います。いつも手弁当というケースも多いです。だから行政でも、民間でも、もうちょっとどこかにつながって活動したほうがいいんじゃないかとは思いますがね。そうしていかないと、いつもボランティアで終わっちゃって、疲弊して辞めていった、抜けていった、というケースがいっぱい出てくるので。

ちゃんと雇用できたり、謝金が払えたり、交通費が出せたりしないといけないと思います。やっぱり自分が生きていけないじゃ、駄目ですよ。それがあることで専門性も高まるし、何よりいい意味でプライドも持てると思うんですよ。そういうふうになって初めて、立法とか行政とも対等に協働できるのかな、という気はします。